

長崎豪雨の大出水との遭遇

長崎南高校地学部

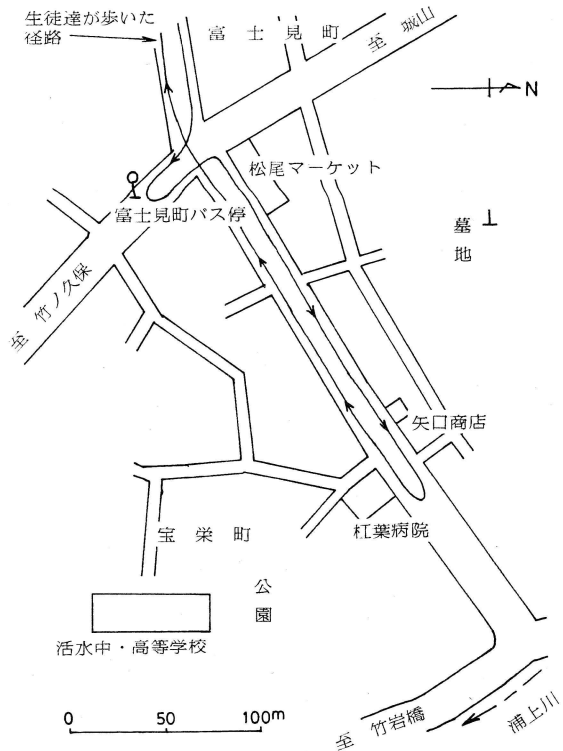
その日私達5人(当時の2年:川上正則・富永昌人, 1年:菅 健一・長濱智生・宮谷和伯)は, 8月に行われるペルセウス座流星群観測について西高地学部と打ち合せをした。その後, 7月24, 25日に行われる予定だった流星観測練習会の準備のため, 地学部のOBで富士見町に住む布袋さん宅へ向かった。途中, 雨が降り出したので明日はないかもしれないと言いながらも, 必要な道具を借りた。もう帰ろうかと言いだした7時頃, 雷が鳴り始め, 雨が激しくなってきた。その時はまだ「あ!あそこに落ちたぞ」とか「稲妻がピンクに光ったぞ」とか言いながら, なぜ雷が落ちるのかなどという話をしていた。すると布袋さんが, 「今帰ると雷に遭って危ないから, 止むまで待ちなさい」と言うので, 私達はその時を待った。

7時30分を過ぎた頃, 雨はますます激しくなっていたが家を出た。門を出ると, 家の前の階段が滝のようになっていた。その中を, 私達はくるぶしまでつかりながら, 富士見町のバス停へと急いだ。まだ8時前だというのに気味が悪いほど真っ暗だった。そうこうするうち, バス停に着いた。車道は深さ20cmほどの流れの下にあった。バスはとうとう姿を見せなかった。みんなで交叉点から松尾マーケットの前を通過して, 浦上川沿いに竹岩橋へ向う予定だった。

水は浦上川へ向かって絶えず流れていた。松尾マーケットの辺りはくるぶしくらいまで水がきていた。途中矢口商店から家に電話を入れ, 「みんな絶対に帰るけん」などと言っていた。さらに進むと, 水はひぎ, も

もと水かさを増し(地形的に川へ向かって低くなっていることもある), 紅葉病院の近くではもう腰近くまでせまってきた。辺りにはドアの半分ぐらいまで(それ以上かも)つかった車が乗り捨てられ, 多くの人が集まって, なにやらただならぬ雰囲気をかもし出していた。私達も危険を感じ水の流れに逆らい, おし戻されそうになりながら来た道を逆戻りした。傘はあってもなくても同じような状態で, 全身びしょぬれになってしまった。

再び布袋さんの家へ着くと, 大変心配して快く私達を迎えてくれ, その夜はお世話になることになった。服からは水がポタポタとしたたりおち, みんな一様に気持ち悪そうだった。服も



借りて着がえさせてもらい、一段落ついたころ、ニュースなどで市街地の様子を知り、みんな自宅と学校へ電話を入れた。ところが、たった5、6本の電話をするのに3時間以上もかかった。その途中、104番に電話番号の問い合わせをしようとしたら、混線したのだろうか、男の人の声で、「お宅、どちらですか」と逆に聞き返されてしまった。今では笑い話だが、それほど街中が混乱していたのだらうと思う。

そうしている一方で、私達は「明日の補習どうするや」とか、「予習せんばおこらるっぞ」とか言ってびっしょり濡れたプリントを広げ解いていたのである。つまり、そのような状態になっても、まだ自分達のおかれている状況が把握できなかつたのである。(私たちだけでなく、誰でもそんな状況になるとは予想できなかつたに違いないと思うが。)

その夜はまんじりともせず、と言いたいところだが、いつの間にかねむってしまい、翌朝6時前に目覚めた。まっ先にテレビをつけると映ったのは、半分壊れかかった眼鏡橋だった。他の市街の様子も見た私達は、そのとき改めて雨の激しさを思い知らされた。

まだ雨が降り続く中、私たちは、生乾きの服に着がえ、雨で縮んだ靴をはき、車で送ってもらったが、その途中で見たものは、泥とゴミの山だった。稲佐の立体交差は水がたまりゴミが浮いており通ることができずに旭大橋を渡っていった。浜の町周辺のひどさは予想以上だった。戸町の方も、戸町トンネルが落石の為通れずバ

イパスをまわった。戸町中学校裏のバス停を過ぎたあたりで、道路がおかしいなと思ってよくみると、50mばかりあったへいが全部なくなっていたのである。近寄ってみると、ほぼ原型をとどめたまま、一段低くなっている畑に落ちていた。これが水の力かと思うとぞっとする思いだった。戸町中学校もグラウンドの土はとられ、コンクリートがむきだしになっていた。フェンスもゴミがつまって曲がり、1m位水がきた跡があった。

その後は、わが地学部の活動は、水害調査が中心となった。10月頃から市内各地点(浜の町、大浦海岸通り、戸町・新戸町地区、中島川・浦上川沿い、城山地区、茂木地区)での水位を測る作業を他校(長崎西高、長崎北高、長崎大学・長崎南商業・長崎東高・瓊浦高有志)と合同で開始した。それが翌年の夏頃までかかり、水害の凄さを私達が認識するだけでなく、後輩達にも教えることができた。その間、2月には水害調査発表会を催し、それまでの成果を発表した。これによって私達の知らないところでの被害の大きさを知ることができた。

しかし、現在私達はこの恐しかった水害のことをもう忘れようとしている。300年に1度の大災害と言われていたが、その翌年山陰で水害がおきたように、いつまたこのような災害がおこらないとも限らないのである。人間はどんなことをしても、自然に勝つことはできないのだから、三たびこのようなことをおこさないためにも、後世へと語りつがなければならないと思う。